

# 大学の授業における私語と 視点取得・友人の数・座席位置の関連

—「私語をすること」「私語をされること」の相違に着目して—

出口 拓彦

本研究は、「私語をすること」と「私語をされること」の相違や視点取得の高低に着目して、教室における座席位置と私語の頻度との関連について検討することを目的とした。東海地方・北海道における2大学の学生418名(男子108名, 女子297名, 不明13名)を対象に、質問紙調査を行った。その結果、視点取得が高い学生は、低い学生に比べて私語の頻度と被私語頻度の相関が高い傾向が示された。このことから、視点取得が高い学生は、他者ないし友人から私語をされた場合に、「私語をしないことで友人に不快感を生じさせる可能性」(出口・吉田, 2005)を感じやすくなることが一因となっている可能性が考えられた。なお、座席位置については、教室後方ほど、「授業と無関係の私語」の頻度および被私語頻度が高い傾向が示された。また、友人の数についても教室後方ほど多い傾向が見られた。さらに、友人の数と私語の頻度・被私語頻度の間には、全般的に弱い正の相関が示された。

## 1. 問題

授業における私語は、初等・中等教育のみならず、高等教育においても大きな問題となっており、これまでに様々な研究がなされている(e.g. 家本, 1990; 小牧・岩淵, 1997; 新堀, 1992; 島田, 1999)。大学・短期大学における私語を扱った研究も少なくない(e.g. 浅井, 2006; 松崎・小熊・嶋田, 2005; 浪江, 2005; 岡田, 2003; 島田, 2002)。

私語の問題に対して、出口・吉田(2005)は「大学生活への適応」という観点に着目し、私語をしている学生は、比較的適応感が高い傾向を報告している。また、私語に対する規範意識が低く、視点取得が高い者は、「授業に関する私語」を比較的頻繁に行う傾向も見いだしている。この現象について、出口・吉田(2005)は、「視点取得が高いことによって、私語をしないことで友人に不快感を生じさせる可能性を敏感に察知し、かつ、規範意識が低いことによって、私語をすることに対する懸念を比較的感じなくなり、授業に関する私語を頻繁に行った可能性が考えられる」(p.164)と考察している。このような過程による私語は、友人が

自分に対して「話しかけてきた」際に、特に顕著になると考えられる。例えば、板書で読めないところについて友人が質問してきた(話しかけてきた)場合、「これを拒絶すると相手に不快感を生じさせる」と推測されやすくなると思われる。しかし、出口・吉田(2005)の研究では、私語に関して「話しかけた頻度」「話しかけられた頻度」という区別はなされていない。このため、このような「私語をされること」の効果について検討する必要があると考えられる。

また、私語の発生過程を検討する際には、学生の座席位置も重要な役割を有していると考えられる(e.g. 出口, 2005; 島田, 2002)。島田(2002)は、「私語をなくすための要望」として21.5%の学生が「座席配置の工夫」を挙げており、26.5%の教師が、私語の発生を未然に防ぐ方法として「座席に関するもの」を回答したことを報告している。

教室内の座席に関して、北川(1999)は、大学生を対象にした調査によって、教卓に近い位置への着席を指向する学生は達成動機が高く、「教師への積極性と授業への積極性がともに高い」傾向を見いだしている。さらに、「教卓に近い位置を指向

する学生ほど友人が多い」(p.22)傾向も報告している(ここでの「友人」とは「親しいクラスメイト」を意味する)。渋谷(1986)は、教室中央後方に着席している学生の試験成績が悪いことを見いだしている。また、教室の後方に着席している学生は、学習意欲は低いものの、学業成績が劣っていることはなかったという報告(矢澤, 2002)もある。

座席位置と私語の関連について、出口(2005)は、教室後方の学生は、「授業と無関係の私語」の頻度が比較的高い傾向や、「授業に関する私語」に対する規範意識と頻度の中に、顕著な関連が示されないことなどを報告している。このことは、座席位置について着目して私語の発生過程を検討することの重要性を示唆していると考えられる。

以上のことから、本研究においては、「私語をすること」と「私語をされること」の相違や視点取得の高低に着目しつつ、教室における座席位置と私語の頻度との関連について検討することを目的とした。さらに、大学への適応の指標として Karasawa(1991)の集団アイデンティティ尺度を用い、大学への同一性(吉田・橋本・安藤・植村, 1999)と私語の頻度の関連についても検討した。

なお、島田(2002)は、「私語が多かった理由」について大学生に調査を行い、「とにかく私語がしたい」(35.2%)、「その時にしか友達と話せない」(12.4%)という回答が見られたことを報告している。また、出口(2006)は、私語の発生過程について、セル・オートマトン(cellular automaton)法によるコンピュータ・シミュレーションを用いて検討している。そして、教室内の仲間集団の数が、私語の発生に影響を及ぼしている可能性を示唆している。これらの研究から、自分の周囲にいる友人の数も、私語の発生に対して少なからぬ影響を有していると考えられる。このため、本研究においては、一緒に授業を受けている友人の数にも焦点を当てて検討することとした。

## 2. 方法

### 2.1 調査対象者および時期

東海地方・北海道における2大学の学生418名(男子108名, 女子297名, 不明13名, 平均年齢18.94歳,  $SD=1.51$ )。調査時期は2005年7月。

### 2.2 測定された変数

1) 私語に対する規範意識 島田(1999)、卜部・佐々木(1999)を基に作成された尺度(出口, 2005; 出口・吉田, 2005)を使用した。この尺度は、授業に関する私語(e.g.「授業の内容に関する疑問点について話した」「板書でよく読めないところについて話した」)、授業と無関係の私語(e.g.「授業には関係のない冗談や笑い話をした」「授業の内容には関係のない世間話をした」)の2つの下位尺度からなる、計8つの質問項目で構成されている。

これらの項目について、「あなたは、以下のことを『良いことだ』と思いますか。それとも『まずいことだ』と思いますか」と質問し、5段階評定で回答を求めた。

2) 私語の頻度・被私語頻度 まず、「私語の頻度」に関する尺度は、出口(2005)および出口・吉田(2005)と同様に、「私語に対する規範意識」に関する8つの質問項目の語尾を、私語の頻度については「話すこと→話した」「話をする→話をした」などと、それぞれ変更したものを使用した。これらの項目に対して、「たくさんした—かなりした—どちらともいえない—あまりしなかった—ぜんぜんしなかった」の5段階評定で回答を求めた。

一方、「被私語頻度」については、「話すこと→話しかけられた」「話をする→話をされた」などと、受動態の文章に変更したものを使用した。これらの項目に対して、「たくさんされた—かなりされた—どちらともいえない—あまりされなかった—ぜんぜんされなかった」の5段階評定で回答を求めた。

3) 座席位置および友人の数 出口(2005)と同様に、教室内の座席位置について、「いままでの授業を通して、一番多かった場所」を回答するように求めた。質問項目は2つである。1つ目は、「教室の前の方—教室の真ん中あたり—教室の後ろの方」の中から1つ選択するものである(以下「縦の座席位置」と記す)。2つ目は、「教室の右側—教室の真ん中あたり—教室の左側」の中から選択するものである(以下「横の座席位置」と記す)。

また、友人の数については、「あなたは、ふだん、何人くらいの友人と一緒に、この授業を受けていますか? 授業を受けているときに、あなたの近くに座っている友人の数を回答してください

い」と質問し、記述式で回答を求めた。

4) 視点取得 Davis (1983) による尺度の日本語版 (水田, 1991) 7項目を使用した。この尺度は、「どのような問題にも必ず賛成と反対の立場があるので、私はその両方をみるようにしている」「友人の立場から見るとどうなるか考えてみることで、彼らをもっとよく理解しようとしている」といった項目で構成されている。これらの項目について、「5.よく当てはまる～1.まったく当てはまらない」の5段階評定で回答を求めた。

5) 大学への同一性 Karasawa (1991) による尺度の日本語7項目版 (大石, 2001) を使用した。この尺度は、「あなたは自己紹介するときや会話の中などで、自分が〇〇大学に属していることに、よくふれる方ですか、ふれない方ですか?」などの「集団に対する同一視」に関する項目5項目と、「あなたにとって本当に大切な友人は、〇〇大学外、〇〇大学内の、どちらに多くいますか?」といった「成員に対する同一視」に関する2項目から構成されている。これらの項目について、7段階評定で回答を求めた。

なお、上記の尺度とは別に、Yamaguchi, Kuhlman, & Sugimori (1995) の改訂版集団主義尺度14項目についての回答も求めた。

### 2.3 手続き

講義時間中に集団で質問紙調査を実施した。回答は匿名で行われた。測定は、50人以上の履修者がいる比較的多人数の授業において行われた。出口・吉田 (2005) と同様に、質問紙には「ここでの『私語』とは、授業内容に関係する・しないに関わらず、『授業中に、学生同士で行う私的な発言』のことをいいます。(ただし、先生が許可した場合の発言は除きます。)」という教示文を記した。また、質問紙に回答した日の授業における私語だけについて回答するのではなく、今までの授業を通しての私語について回答するように求めた。

各尺度は、「大学への同一性」「視点取得」「私語の頻度」「被私語頻度」「規範意識」「座席位置」という順で配置した (なお、「改訂版集団主義尺度」は一番目に配置した)。

## 3. 結果

### 3.1 指標の算出

まず、回答に問題があると思われる調査対象者や、年齢が30歳以上の調査対象者、計4名を分析から除外した。30歳以上の者を除外したのは、本研究では、教室内の友人関係について扱っており、20歳前後の学生同士の関係と、20歳前後と30歳以上の学生の関係は、必ずしも同様とは限らない可能性が考えられたためである。

次に、以下の方法で各指標を算出した。

1) 規範意識および私語の頻度・被私語頻度 因子分析 (一般化最小2乗法, プロマックス回転) をそれぞれ行い、固有値の減衰状況および因子の解釈可能性から2因子解を選択した。因子間相関は、規範意識.25、私語の頻度.45、被私語頻度.52であった。また、各因子を構成する項目は、3つの尺度とも全て同様であった。第1因子は「授業や勉強とは関係のない用事について話した」「授業には関係のない冗談や笑い話をした」などの4項目から構成され、「授業と無関係の私語」と命名された。一方、第2因子は「授業の内容に関する疑問点について話した」「先生の話で聞き逃したことについて話した」などの4項目から構成され、「授業に関する私語」と命名した。このような因子分析結果は、出口・吉田 (2005) と基本的に同様のものであった。

次に、因子ごとに $\alpha$ 係数をそれぞれ算出した。その結果、 $\alpha = .85 \sim .92$ の範囲であり、高い内的整合性が示された。このため、因子ごとに得点を合計、項目数で除算し、これを指標とした (後述の「座席位置」以外の尺度についても同様)。なお、規範意識の指標については、高い値であるほど、私語に対して否定的であることを示している。

2) 座席位置および友人の数 縦の座席位置 (前方-中央-後方)・横の座席位置 (右側-中央-左側) への回答をそのまま指標とした。なお、縦の座席位置の $n$ は、前方82、中央155、後方163であった。一方、横の座席位置については、右側111、中央163、左側126であった。

また、一緒に授業を受けている友人の数についても、回答をそのまま指標にした。「4~5人」というような回答については、平均値を小数点第1位で四捨五入した値を指標とした。

3) 視点取得 全7項目の $\alpha$ 係数を算出したと

ころ  $\alpha = .60$  と比較的低い値が示された。このため、各項目を除外した場合の  $\alpha$  係数をそれぞれ算出した。その結果、「相手の立場に立って考える」というのは、なかなかむずかしい」という項目を除外した場合の  $\alpha$  係数は.71であり、最も高かった。このため、本項目を除外した6項目の得点を合計し、これを指標とした。

4) 大学への同一性 吉田・橋本・安藤・植村(1999)を基に、全項目の  $\alpha$  係数を算出した。その結果、 $\alpha = .69$  と一定の内的整合性が示された。このため各項目の得点を合計し、これを指標とした。

なお、改訂版集団主義尺度についても、全項目の  $\alpha$  係数を算出したところ、 $\alpha = .75$  と一定の内的整合性が示された。このため各項目の得点を合計し、これを指標とした。

### 3.2 各指標間の関連

1) 視点取得の高低による私語の頻度と被私語頻度の関連 まず、視点取得の平均値を基に調査対象者を高群・低群に2分した。視点取得の平均値は3.54、 $SD = 0.64$ であった。次に、視点取得高群・低群ごとに、私語の頻度と被私語頻度の相関係数を算出した (Table 1)。

その結果、「授業に関する私語」については、高群.78、低群.68 ( $ps < .01$ )であった。一方、「授業と無関係の私語」については、高群.83、低群.75 ( $ps < .01$ )であった。高群と低群の相関係数の差を検定したところ、「授業に関する私語」「授業と無関係の私語」共に、高群の方が高い傾向が示された ( $ps < .05$ )。

#### 2) 座席位置別の私語の頻度および被私語頻度

横の座席位置 (左-中央-右) × 縦の座席位置別 (前方-中央-後方) の対応のない2要因分散分析を行った。

その結果、「授業と関係のある私語」については、私語の頻度・被私語頻度共に、有意な主効果・交互作用効果は示されなかった。「授業と無関係の私語」については、私語の頻度・被私語頻度共に縦の主効果のみ示され ( $ps < .01$ )、教室の後方ほど、これらの頻度が高い傾向が示された。出口(2005)と同様に、横の座席位置と、私語の頻度や被私語頻度との間には関連は示されず、縦の座席位置のみに関連が示された。このため、以後の分析では、縦の座席位置に着目して分析を行った。

3) 私語の頻度と被私語頻度の関連 縦の座席位置別に、私語の頻度と被私語頻度の相関係数を算出した (Table 2)。その結果、「授業に関する私語」については、教室前方.84、中央.69、後方.76 ( $ps < .01$ )であった (相関係数の差の検定結果は  $p < .05$ )。一方、「授業と無関係の私語」については、教室前方.85、中央.75、後方.78 ( $ps < .01$ )であった (差の検定結果は  $n.s.$ )。

なお、座席位置別の規範意識と私語の頻度との相関係数についても算出した (Table 3)。その結果、「授業に関する私語」については、教室前方-.39 ( $p < .01$ )、中央-.18 ( $p < .05$ )、後方-.07 ( $n.s.$ )であった (差の検定結果は  $p < .10$ )。一方、「授業と無関係の私語」については、教室前方-.59、中央-.45、後方-.25 ( $ps < .01$ )であった (差の検定結果は  $p < .01$ )。全般的に、前方-中央-後方の順で、相関係数が高い傾向が示され、出口(2005)と同様の結果となった。

Table 1 私語の頻度と被私語頻度の相関係数 (視点取得別)

		私語の頻度	
		授業に関する私語	授業と無関係の私語
被私語頻度	授業に関する私語	.78** / .68**	.47** / .30**
	授業と無関係の私語	.54** / .27**	.83** / .75**

左：高群，右：低群 (視点取得) \*\* $p < .01$

Table 2 私語の頻度と被私語頻度の相関係数 (座席位置別)

		私語の頻度		
		授業に関する私語	授業と無関係の私語	
被私語頻度	授業に関する私語	.84** / .69** / .76**	.23* / .40** / .41**	
	授業と無関係の私語	.28* / .47** / .44**	.85** / .75** / .78**	

左：前方，中：中央，右：後方 (座席位置) \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

Table 3 私語の頻度と規範意識の相関係数（座席位置別）

		私語の頻度		
		授業に関する私語		授業と無関係の私語
規範意識	授業に関する私語	-.39** / -.18* / -.07	-.45** / -.36** / -.26**	
	授業と無関係の私語	-.23* / -.11 / .05	-.59** / -.45** / -.25**	

左：前方，中：中央，右：後方（座席位置） \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

Table 4 友人の数と私語に関する諸指標の相関係数（座席位置別）

		友人の数		
		規範意識	授業に関する私語	-.11 / -.05 / -.09
	授業と無関係の私語	.01 / .03 / .04		
私語の頻度	授業に関する私語	.23* / .17* / .28**		
	授業と無関係の私語	.24* / .15 / .13		
被私語頻度	授業に関する私語	.17 / .22** / .22**		
	授業と無関係の私語	.25* / .21** / .22**		

左：前方，中：中央，右：後方（座席位置） \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

Table 5 大学への同一性と私語に関する諸指標の相関係数（座席位置別）

		大学への同一性		
		規範意識	授業に関する私語	.03 / -.04 / -.20*
	授業と無関係の私語	.20 / -.03 / .12		
私語の頻度	授業に関する私語	.22 / .19* / .16*		
	授業と無関係の私語	-.17 / .04 / -.01		
被私語頻度	授業に関する私語	.21 / .19* / .08		
	授業と無関係の私語	-.21 / .09 / -.03		

左：前方，中：中央，右：後方（座席位置） \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

4) 友人の数と私語に関する諸指標の関連 縦の座席位置別に、友人の数と規範意識・私語の頻度・被私語頻度の相関係数を算出した (Table 4)。その結果、友人の数と私語の頻度・被私語頻度の間には、全般的に弱い正の相関が示された。一方、友人の数と規範意識の間には、有意な相関は示されなかった。

なお、友人の数の平均値 (標準偏差) は、教室前方 3.46 (2.43)、中央 4.32 (2.37)、後方 4.60 (2.59) であった。縦の座席位置を独立変数、友人の数を従属変数とした 1 要因 3 水準の対応のない分散分析を行ったところ、有意な主効果が示された ( $p < .01$ )。教室の後方ほど友人の数が多いという結果は、北川 (1999) と逆の方向性を示すものであった。

5) 大学への同一性と私語に関する諸指標の関連 縦の座席位置別に、大学への同一性と規範意識・

私語の頻度・被私語頻度の相関係数を算出した (Table 5)。その結果、教室前方においては、いずれの指標間においても、有意な相関は示されなかった。教室中央においては、大学への同一性と、「授業に関する私語」の頻度および被私語頻度の間には有意な相関が示されたが、非常に微弱なものであった。教室後方においては、大学への同一性と「授業に関する私語」に対する規範意識の間に、有意な負の弱い相関が示された ( $r = -.20$ ,  $p < .05$ )。

なお、大学への同一性の平均値 (標準偏差) は、教室前方 3.59 (0.88)、中央 3.59 (0.90)、後方 3.63 (1.02) であった。縦の座席位置を独立変数、大学への同一性を従属変数とした 1 要因 3 水準の対応のない分散分析を行ったところ、有意な差は示されなかった。

また、縦の座席位置別に、集団主義と大学への

Table 6 集団主義と私語に関する諸指標の相関係数（座席位置別）

		集団主義		
規範意識	授業に関する私語	-.17	/.11	/.06
	授業と無関係の私語	-.08	/.08	/.09
私語の頻度	授業に関する私語	-.06	/.09	/.08
	授業と無関係の私語	.08	/.24**	/.02
被私語頻度	授業に関する私語	-.12	/.11	/.10
	授業と無関係の私語	.00	/.21*	/.03

左：前方，中：中央，右：後方（座席位置）

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ 

と規範意識・私語の頻度・被私語頻度の相関係数についても算出した（Table 6）。その結果、教室中央において、集団主義と、「授業と無関係の私語」の頻度および被私語頻度の間に、有意な正の弱い相関が示された。しかし、これ以外の指標の組み合わせについては、有意な相関は示されなかった。集団主義の平均値（標準偏差）は、教室前方 2.98 (0.52)、中央 2.96 (0.47)、後方 3.06 (0.48) であった。縦の座席位置を独立変数、集団主義を従属変数とした 1 要因 3 水準の対応のない分散分析を行ったところ、有意な差は示されなかった。

#### 4. 考察

私語の頻度と被私語頻度の間には、同じ種類の私語（「授業に関する私語」ないし「授業と無関係の私語」同士）については、全般的に高い相関が示された。特に、視点取得が高い学生は、低い学生に比べて私語の頻度と被私語頻度の相関も高い傾向が示された。これは、視点取得が高い学生は、他者ないし友人から私語をされた場合に、「私語をしないことで友人に不快感を生じさせる可能性」（出口・吉田，2005）を感じやすくなることが一因となっていると考えられる。

座席位置については、教室後方ほど、「授業と無関係の私語」の頻度および被私語頻度が高い傾向が示された。これは、出口（2005）の結果と同じ方向性を示すものとなった。また、友人の数についても教室後方ほど多い傾向が見られ、友人の数と私語の頻度・被私語頻度の間には、全般的に弱い正の相関が示された。これらのことから、教室後方は、友人と一緒に授業を受ける学生が座ることが多く、友人から私語をされたり、逆に友人に対して私語を行うことによって、その頻度が高くなったのではないかと推測される。また、教室の

後方に着席している学生の学習意欲は低いという報告（矢澤，2002）もあることから、友人の数だけでなく、学習意欲の低さの表れとして、私語が生じた可能性も考えられよう。本研究において、縦の座席位置による差が見られたのは「授業と無関係の私語」のみであり、学習意欲が影響を及ぼしていることは十分に考えられる。

大学への同一性については、私語に関する諸指標との間には、さほど強い関連は示されなかった。出口・吉田（2005）は、「授業と無関係の私語」の頻度と「対人関係に対する適応感」の間に  $r = .40$  の相関があることを見いだしている。しかし、今回の研究では、「授業と無関係の私語」に関する諸指標と大学への同一性の間には、有意な相関は示されなかった。本研究で用いられた尺度は、「成員に対する同一視」についての項目だけでなく、「『あなたは典型的な〇〇大学の人だね』と言われたら、よい感じがしますか、それとも悪い感じがしますか？」「あなたは〇〇大学にどれくらい愛着を感じていますか？」というような「集団に対する同一視」についての項目が比較的多く含まれている（7 項目中 5 項目）。このため、出口・吉田（2005）と異なった結果となったのではないかと考えられる。

最後に、本研究では、本人が持つ規範意識のみを扱った。しかし、私語は基本的には他者（相手）と行うものであると思われる。今後は、本人の規範意識だけでなく、一緒に授業を受けている友人が持つ「私語に対する規範意識」の影響についても検討する必要があるだろう（e.g. 卜部・佐々木，1999）。これに関連して、友人関係のあり方（e.g. 岡田，1998）などにも着目し、対人的な要因が私語の発生に及ぼす影響について検討していくことが重要であろう。また、Kitagawa（1998）や北川（1999）は、学生の座席選択の一貫性は、場所によって異なる傾向（教室中央はさほど高くはない）を

示唆している。このように、学生は常に同じ位置に着席しているとは限らないという事項 (e.g. 矢澤, 2002) についても、留意する必要があるだろう。

## 引用文献

浅井亜紀子 (2006). 大学生の授業における規範意識と行動：私語と携帯メールを中心に *Caritas*, **40**, 37-50.

Davis, M. H. (1983). Measuring individual differences in empathy: evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 113-126.

出口拓彦 (2005). 私語に対する規範意識・集団規範の認知と頻度の関連：公的・私的自意識および座席位置に着目して 藤女子大学紀要 (第II部), **43**, 13-18.

出口拓彦 (2006). DSITを援用した私語発生過程のシミュレーション (2)：仲間集団の数および成員に対する強度が私語の発生過程に及ぼす影響 日本教育心理学会第48回総会発表論文集, 134.

出口拓彦・吉田俊和 (2005). 大学の授業における私語の頻度と規範意識・個人特性との関連：大学生活への適応という観点からの検討 社会心理学研究, **21**, 160-169.

家本芳郎 (1990). 私語・おしゃべりの教育学：私語は指導の出発点 学事出版.

Karasawa, M. (1991). Toward an assessment of social identity: the structure of group identification and its effect on in-group evaluations. *British Journal of Social Psychology*, **30**, 293-307.

Kitagawa, T. (1998). The latent four-zone structure in classroom seating space. *Japanese Psychological Research*, **40**, 40-46.

北川歳昭 (1999). 態度としての座席行動 就実論叢, **29**, 17-30.

小牧一裕・岩淵千明 (1997). 授業規範：反規範行為における意識構造 日本心理学会第61回大会発表論文集, 381.

松寄久実・小熊順子・嶋田美津江 (2005). 授業中の私語と学生の意識：私語についての介護福祉科のアンケートの分析 浦和論叢, **35**, 71-105.

水田恵三 (1991). 思いやりの発達心理 A. H. バス (著) 大淵憲一 (監訳) 対人行動とパーソナリティ pp.111-139. (A. H. Buss (1986). *Social Behavior and Personality*. Lawrence Erlbaum Associates.)

浪江美子 (2005). 講義中の私語についての一考察：本学学生への質問紙調査から 福岡女子短大紀要, **66**, 29-43.

大石千歳 (2001). 集団・リーダーシップ 堀 洋道 (監) 吉田富二雄 (編) 心理測定尺度集II：人間と

社会のつながりをとらえる〈対人関係・価値観〉サイエンス社. pp.215-271.

岡田圭二 (2003). 授業に対する興味, 分かりやすさの度合いと私語の音量の関係：興味深ければ, 私語は少なくなるのか 愛知大学短期大学部研究論集, **26**, 11-22.

岡田 努 (1998). 現代青年に特有な友人関係の取り方と自己愛傾向の関連について 立教大学教職研究, **9**, 29-39.

渋谷昌三 (1986). 教室のプロクセミックス：座席位置の分析 山梨医大紀要, **3**, 40-49.

島田博司 (1999). 私語の誘惑と人間関係 六甲出版.

島田博司 (2002). 私語への教育指導：大学授業の生態誌2 玉川大学出版部.

新堀通也 (1992). 私語研究序説：現代教育への警鐘 玉川大学出版部.

ト部敬康・佐々木薫 (1999). 授業中の私語に関する集団規範の調査研究：リターン・ポテンシャル・モデルの適用 教育心理学研究, **47**, 283-292.

Yamaguchi, S., Kuhlman, D. M., & Sugimori, S. (1995). Personality correlates of allocentric tendencies in individualist and collectivist cultures. *Journal of Cross-cultural Psychology*, **26**, 658-672.

矢澤久史 (2002). 教室における座席位置と学習意欲, 学業成績との関係 東海女子大学紀要, **22**, 109-117.

吉田俊和・橋本 剛・安藤直樹・植村善太郎 (1999). 大学生の適応過程に関する縦断的研究 (1) 名古屋大学教育学部紀要 (心理学), **46**, 75-98.

## 【謝辞】

本研究にご協力いただきました、名古屋大学大学院教育発達科学研究科下木戸隆司氏や大学の先生方、学生の皆様に深く感謝いたします。また、英文題目の校閲をしていただきました、藤女子大学人間生活学部の木村晶子先生にも心よりお礼申し上げます。

本研究の一部は、文部科学省科学研究費補助金 (若手研究B, 課題番号18730414「授業における私語の発生過程に対する調査およびシミュレーションによる検討」) の援助を受けた。